DIGITAL × Shipping

アイデアソンで企業の枠超え議論

■ ＩｏＳ－ＯＰ組織、イノベーション創出の場へ

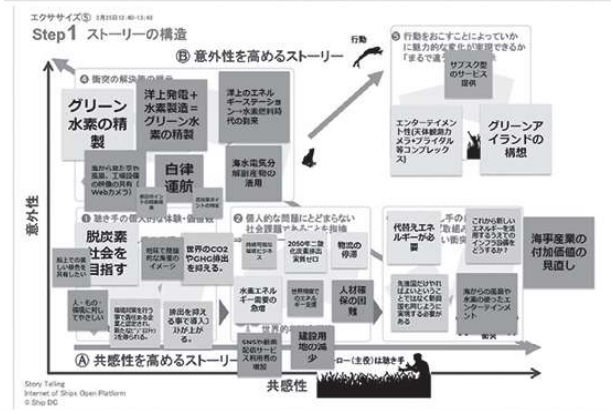
社会課題の解決や新たなビジネス創出に向けたアイデアを競い合う、海事業界のアイデアソン「第２回海事DATA／AIアイデアソン」が２月24日と25日の２日間にわたって開催された。シップデータセンター（ShipDC）が事務局を務める会員組織「ＩｏＳ－ＯＰ（Internet of Ships Open Platform）コンソーシアム」の主催で、参加者は、データやＡＩなどの活用とニーズや社会課題を結合し、どのように新しい価値の創造につなげるか、企業の枠を超えて自由闊達に議論した。記者自身もチームの一員として議論に参加。その様子は後日レポートする。

２回目の開催となる今回は、コンソーシアムの会員企業に限定せずに参加者の枠を拡大し、参加者全員をつないだオンラインで開催した。海運会社、造船所、舶用メーカー、船級、保険、商社など異なる業種の中堅社員29人に加えて、学生10人の計39人が参加。社会人６チームと学生２チームにそれぞれ分かれ、会社名・役職などを伏せて２日間にわたってグループワークを実施した。

第１回目の開催に続いて、日本郵船の「ＮＹＫデジタルアカデミー」の石澤直孝学長が講師を担当した。コダックの銀塩フィルム衰退、３ＰＬビジネス、海上コンテナなどの例を示しながら、イノベーション創出に向けたアイデアの出し方や考え方や、ゲームメイキングの構造などをわかりやすく解説。シリコンバレーの新規ビジネス創出の調査データを引用し、「有望とされた新規ビジネス約4000件ののうち具体的な成果を出せたのは２～３件。その中にはウーバーやエアビーアンドビーが入っている。質より量が重要で、4000件やればできるという意識で取り組んでもらいたい」と参加者に対して熱く語りかけた。

講義の石澤直孝氏。全参加者をオンラインでつなぎ開催

グループワークでは、各チームが「ヒトの本性」、「社会潮流」、「技術」、「ビジネス」の各テーマごとに議論。ＡＩやＩｏＴ、宇宙工学などの「技術」と、シェアリングエコノミーやフリーミアムなどの「ビジネス」スキームを活用して、「ヒトの本性」や「社会潮流」で議論したニーズや社会的課題と結合し、斬新な解決策やアイデアを創出した。



グループワークの一例

２日目の最後には各チームが考えたアイデア発表を実施。発表後に海事産業の技術トップを中心とした審査委員による講評があり、審査員からは「実現可能性は十分にある」「それぞれのアイデアを結合するともっとよくなる」「様々な分野に活用できる」「あと30年若かったら一緒に取り組みたい」といったコメントが出た。高齢化社会に対するアイデアが多く見受けられ、審査員からは「現役世代だけでなく、高齢者まで広くみて、“皆の幸せ”を根底とした点が非常に良かった」といった声もあった。また、質問や感想はチャットを通じて発表時にリアルタイムで流れるオンラインならではの形式がとられ、大胆な発想に会場が盛り上がりを共有した。

商船三井、役員異動

（３月31日）

▷辞任　代表取締役専務執行役員・丸山卓＝４月１日付でダイビル専務執行役員に就任予定

商船三井、モーリシャス環境回復・社会貢献活動を継続

商船三井は“Wakashio”事故に関する特設ページで紹介するモーリシャス環境回復・社会貢献活動を更新した。２月26日発表した。

事故の影響を受けた漁業従事者やその家族を支援する国際ＮＧＯのカリタス・モーリシャスのプロジェクトに協力することを決めた。また、プラスチック再生活動を行う現地ＮＧＯのプレシャス・プラスチック・モーリシャスにその作業場となるコンテナハウスを寄贈。さらに、マングローブの調査・保全活動で現地ＮＧＯリーフ・コンサベーションのプロジェクトを支援することを決めた。